

◆あなたに語る・時代を超えて生きる心◆

てんじ かいせつ
 展示中の作品について、研究員が分かりやすく解説します。

これは本なの？

あざ しきさい なんざつ むづか
 鮮やかな色彩で何冊か重なった本(図1)。難しそうだけど中身はどんなものだろう。しかし、読んでみようとする本の^{ページ}頁をめくろうとしてめくれない。それもそのはず、この本は土を練り固めて焼いて作られたやきものだからです。

それでこの本のよう
 なものは、いったい何
 のために用いられたも
 のなのでしょう。答
 えからいってしまいま
 すが、これは、硯箱の
^{すずりばこ}蓋として用いているも
^{ふた}の
 のです(図2)。『^{えい が もの}栄花物
^{がたり}語』という歴史物語の
^{わ そうぼん}和装本を積み上げた状
^{たい}態にしたものを、その
^{けいじよう}形状を写し取ってやき
 ものとして作り出して
 います。よく見てみる
 と冊子の数が分かりま



図1 色絵栄花物語冊子形硯箱 江戸時代 18～19世紀 京都国立博物館蔵

すが、7冊重ねた状態が表されており、1冊ずつの厚さが異なるなど、細部へのこだわりもみることができます。『^{えい が もの がたり}栄華物語』とは、全40巻から構成される平安時代後期の歴史書で、^{ふじわらのみちなが}藤原道長(966～1028)、^{よりみち}頼通(992～1071)の^{えい が}栄華を中心に、^{へいあん きぞく}平安貴族の生活を物語風に綴ったものです。

^{すずりばこ}硯箱の蓋の上に、^{たんざく}白い短冊を貼り付けたように^{ひょうげん}表現した部分に『^{えい が もの がたり}栄花物語 御賀』と^{さびえ}鏤絵で記してあります。『^{えい が もの がたり}栄華物語』の「御賀」の巻は、^{ふじわらのみちなが}藤原道長の妻である^{つま}倫子の六十のお祝いの様子を記した巻で、「御賀」という言葉が特に^{ちようじゆ}長寿をよるこび祝うという、おめでたい言葉であることから、一番上になる^{まさき}巻にこの巻が選ばれたことと考えられます。「御賀」の題箋の周りに、^{おん が}紺色の^{だいせん}紗綾文地の上に、^{こん さ やもんじ}赤色で菊花、^{きつ か}緑色で菊の葉を描き、^{えが きん}金彩で縁取りをしています。^{さい ふちど}菊文の部分には^{きくもん}すかし彫りがみられ、その部分が少し^{すす}煤けています。このことから、^{すずりばこ}硯箱になる前は、^{こうろ}香炉として使われていたと考えられます。また、

この蓋の裏側と、身の部分の硯箱には梨地蒔絵が施されています。蓋裏については、香炉として使われた時の煤けた部分を覆い隠すためだったと思われます。

さて、この硯箱のよ
うな色絵陶器の一群
は、一般に古清水と呼
んでいます。同じよう
に冊子の形をした香炉
や花入などが他にみら
れることから、江戸時
代に流行していた作風
であったと思われま
す。印や銘などはみら
れないことから、どこ
の窯で焼かれたのか、
そして、どのような陶
工が作ったものかにつ
いてははっきりとしませ



図2 色絵栄花物語冊子形硯箱(身・蓋) 江戸時代 18~19世紀 京都国立博物館蔵

ん。鹿苑寺（一般に金閣寺）の住持の鳳林承章（1593～1668）が記した日記『隔莫記』などの記述から、京都には清水焼、粟田口焼、八坂焼、御菩薩池焼、音羽焼、修学院焼、岩倉焼など、いまでも地名として残る場所に様々な陶器窯があったことがわかっています。ことにこの硯箱のような色絵陶器などは、どの窯においても、作られる形や作風が似通っており、一部を除いては多くが窯の名前を記した印（判子）、やきものを作った陶工の名前などが分かる銘を書くなどしていないことから、区別が難しく、それらのやきものの総称として古清水と呼ばれます。

日本文学の研究の方々に教えていただいたのですが、『栄花物語』は江戸時代にもよく読まれ、寛文年間（1661～73）には版木に彫り付けて作った整版本が出来ており、それが9冊組で作られていることがわかっているそうです。この硯箱は本を糸で綴じた部分が紙の束に合わせて膨れているところや、蓋の上部が実際に本を重ねているかのようになわんでいるところなども細部が忠実に表現されています。こうした状況からこの硯箱を作った陶工は、実際に本が重なっている状態を見てから作っている可能性が高いと考えられます。仮にこの硯箱が香炉として用いられたときに台の部分があり、その部分が2冊分の本を現わしていたとすると、蓋の7冊分と合わせて、寛文年間の9冊組の『栄花物語』と冊数が一致します。このように本や文学など、他の分野の視点からやきものをみると、作られた時代性や人々の好みなどが分かり、やきもの分野では想定し難いことも見えてくることがあります。

当館の展示でも様々な分野の作品が展示されていますので、皆さんもちょっと見方を変えて作品を見てはいかがでしょうか。

（工芸室 降矢哲男）